

現代日本における移住者の使用言語に関する研究

——談話分析の観点を中心に——

中 内 彩 乃

はじめに

現代日本語研究の分野において、方言（使用言語）調査を行う場合、大抵において、話者（インフォーマント）は、その地域の「はえぬき」の人物である。この場合の「はえぬき」とは、ある地域に生まれてから調査時までずっとその地域に住み続けている人物を主に指す。「はえぬき」の人物を話者として選抜する理由は、その地域の方言の特徴をより明確に記録することを目的としているためである。それゆえに、これまで「はえぬき」にはあたらぬ人物の使用言語に関する調査は一部の特殊なケース（北方移民など）を除いて、ほとんど行われず、また、調査方法も確立されていない。だが、交通機関や通信手段の発達した現在の日本社会において、「はえぬき」にあたらぬ人物が占める人口への割合は、決して少なくない。

本稿は、これまで調査対象となりえなかつた「はえぬき以外」のある一人の人物の使用言語について筆者が行つた調査を、談話研究の観点の主軸にまとめたものである。言語形成期を東京都と徳島県で過ごした転勤族の子女一人を話者（以下、話者Aと表記）として設定し、「はえぬき」に該当しない話者Aが成人後にどのような言語を使用するかを調査・分析することを本研究の目的とする。

1. 先行研究概要

日本語における談話分析研究として、東京方言と関西方言の談話の文体そのものに地域性を認めた、久木田恵の「東京方言の談話展開の方法」（1990）が挙げられる。久木田は、談話の一文一文の文頭・文中・文末の表現を体系化した後、その性質や役割などを分析するという方法を用いて二つの談話展開の型を認めた。「主観直情型」と「客観説明累加型」である。「主観直情型」とは、話者の主観を露に述べ聞き手を納得させていく談話の展開方法で、久木田はこれを東京方言話者の談話から見出し、「東京型」と

した。一方、「客観説明累加型」は、順接の接続詞で客観説明を積みかけるように累加して述べていく展開方法で、久木田はこれを「関西型」とし、「東京型」と対極をなすものと位置づけた。その後、田中香織（2004）が、英語の談話展開研究の方法として、泉子・k・メイナード（1997）が社会言語学的談話分析として挙げた、Labov and Waletzkey（1967）およびLabov（1972）の研究を参照し、Labovらの論における「評価（Evaluation）」の2つのパターンが、すなわち久木田の「主観直情型」と「客観説明累加型」に共通するのではないかという仮説を立て、ある程度の長さのある談話には小さなテーマが存在することを発見し、場合により久木田の分析表に「小テーマ」や「要素・詳細」の項目を設けることを唱えた。

さらに、畑中宏美（1994）、園部美由紀（1997）、野崎希世江（1996）、須崎由嘉（1999）らの研究結果から、談話の型は単純に「糸魚川・浜名湖線」と呼ばれる東西方言境界線との対比や、談話資料提供者の居住経験のみに基づいて決まるわけではないということが分かった。また、そもそも談話展開の類型が「東京型」と「関西型」の2種類のみで十分なのか否か、また、談話展開に言語形成期獲得方言の影響が見られるかを、齋藤孝滋らフェリス学院大学地域言語調査会が「共通語使用の談話展開類型と言語形成期獲得方言の影響」（2000）という題目で、調査・研究した。その結果、両型の要素を持つ「中間型」も認められた。ただし、この際使用された談話資料はさまざまな地方出身の若年女性に意図的な共通語使用を求め、それらを談話の型にのみ焦点を当てて分析したものであり、この「中間型」の「型」とは談話の型のことである。

さて、人間の使用言語がある程度、限定・完成に至るまでの期間を「言語形成期」と呼ぶ。この概念については研究者によってかなり見解の差が生まれる。例えば、社会言語学者の柴田武は第一言語（母語）の形成を「言語形成期」として提唱したが、その際、柴田の論での言語形成期は4歳ごろから14歳ごろまでを指している（柴田、1956）。また、方言学者の大橋勝男は、日本国内の共通語圏ではない地域における共通語化に関する国立国語研究所の山形県鶴岡市での調査結果を元に、「三十四歳ぐらまでは、ことばは変わり得るといことがわかった」と述べている（大橋、1983）。さらに、「従来、三歳頃～十三歳頃までを言語形成期とし、個人の言語はこの時期に形成され定着すると言われてきたが、この調査結果（国立国語研究所による山形県鶴岡市での調査の結果）により、言語形成期というものは、そう固い動きのとれないものとは考えるべきことではないことがわかった」とし、各種メディアから受ける言語形成への影響も大いに考慮すべき点であると、その文中で述べている。本研究では、あくまで「言語形成期」に異なる地域言語を持つ二ヶ所以上の地域でそれぞれ一定以上の期間を過ごした子どもが、

成人後にどのような言語を使用するのかを明らかにすることが目的である。そこで、基本として「言語形成期」は柴田の4歳ごろから14歳ごろまでと仮定する。

2. 話者Aの談話分析

2. 1. 目的・方法

「はえぬき」ではない話者Aの談話を、久木田（1990）の分析表を発展させた田中（2004）の分析表に基づいて、分析することにより、これまで方言研究・言語研究の対象と見なされることの少なかった、「はえぬき以外」の人物の談話がどのような形態をなすのかを探ることを目的とする。

話者Aが普段通っている学校の空き教室のひとつを借りて、ICレコーダーで談話を録音した。自然発話を録音するため、話者Aがリラックスできる環境を設定し、話者Aの了承を得て、録音機を話者Aの目の前の机の上に置き、録音した。その際、聞き手となる研究者は、机をひとつ挟んで、斜め横に座った。録音機に慣れてもらうため、最初は近況報告などの雑談をし、話者がリラックスしてきたところで、あらかじめ相談して決めたテーマについて、話者に説明してもらった（以下、談話資料1と表記）。

〈談話資料1の概要〉

調査日時：2004年5月20日 17：20～18：10 場所：話者の通う学校（横浜市）

録音機材：ICレコーダー（SONY製ICD-MS2） 話者：話者A、聞き手：筆者

話者Aプロフィール…職業：学生、性別：男性、年齢：21歳5ヶ月（録音当時）

話者Aを育てた人の出身地…父親・愛媛県、母親・徳島県

家族構成：父、母、本人、妹 録音当時の住環境：一人暮らし

話者Aの居住経験…0～6歳：徳島県徳島市、6～11歳：東京都世田谷区

11～18歳：徳島県徳島市、18歳～録音時：神奈川県横浜市

- ※ 話者は徳島県徳島市の出身であるが、父親の仕事の都合で、6歳から11歳までを東京都世田谷区で過ごした。進学のため横浜市に引越して、録音時は一人暮らしをしていた。
- ※ 談話を録音する際に、話者Aに説明してもらうテーマとして、話者Aからの提案で「私のテニス理論」を設定した。テニスは話者Aにとって、非常に身近で愛着のあるスポーツである。

2. 2. 予測

話者Aが6歳～11歳までを過ごした東京都世田谷区は、端的に述べるとするならば、

いわゆる「共通語」が使用されている地域である。一方、徳島県徳島市は「徳島方言」が使用されている地域にあたる。徳島市は、徳島県全域の中で最も大阪方言に近い言葉が使用されている「下郡地域」に位置し、アクセント体系としては「近畿中央式アクセント」に非常に近い体系を持つとされている。久木田の説から推察すると、徳島方言を使用する「はえぬき」の話者の談話展開の型は「関西型」である。一方、東京都世田谷区の方言を使用する「はえぬき」の話者の談話展開の型は「東京型」となる。話者Aの談話展開の型は、このふたつの型のどちらかか、またはふたつの型の混在する新しい型に分類される可能性があることが予測される。

2. 3. 話者Aの談話資料1とその分析表

〈表の見方〉

以下の分析表および添付の「談話資料1（漢字かな表記）」との関係を例としてここに述べておく。

	小テーマ	要素+詳細	内容	文頭	文中	文末
1	話題	要旨：何の話か	話題確認			
2	テニスというスポーツ	評価：自分の意見	所感	ソモソモ	ノ+ネ	
3			状況説明		ヤッパ	

1 テニス理論…／2 そもそも、テニスは、多分技術半分、精神半分のスポーツだと思うのね。／3 どんなに技術力があっても、やっぱ、精神力ーが、ないと、／4 いやっぱそれについてかないと思うんだよ。／

分析表左端の数字は談話資料1を活字化した添付の「談話資料1（漢字かな表記）」に対応している。「／」で文章を区切り、「／」から次の「／」までを一文と考える。下線部（そもそも、のね、やっぱ、いやっぱ、よ）のように、特徴的と思われる部分を抜き出し、その部分が一文の中のどのあたりに出現したかを明確にするため、分析表の「文頭」「文中」「文末」にそれぞれ書き込んだ。また、「内容」の欄に一文全体が持つ要素を記入した。以上の点を踏まえ、下記の分析表を作成した。

	小テーマ	要素+詳細	内容	文頭	文中	文末
1	話題	要旨：何の話か	話題確認			
2	テニスというスポーツ	評価：自分の意見	所感	ソモソモ	ノ+ネ	
3			状況説明		ヤッパ	

4			所感	イヤッパ		ヨ
5	野球のエース	付加：例の提示	状況説明			
6			状況説明付加1	コルワ		デ
7			状況説明付加2			ワケ+ネ
8	テニスのエース	評価：	所感	デ	ネ、ッテエカ	デ
9			状況説明			ワケ+ヨ
10		評価：	状況説明付加1			モ
11		思案				ナ
12		評価	状況説明付加2		ッテエカ	ノ+ネ
13		挿入	状況説明	ソーワ		ネ
14			状況説明付加3			ノ+ヨ
15			状況説明付加4	ソイデ		
16			状況説明付加5			ワケ+デショ
17			状況説明付加6	トナルト	ネ、ッテ、ッテ	
18		思案	思案	トカ	ナンカ	ナ、ソー
19		思案	思案	ダカラ	ソー、	ソー
20		評価・結語	所感	ダカラア		ノ+ネ、ウン
21			状況説明			シ
22		評価・結語：しめくくりの言葉	所感	ソー	ン	
23	自分の理想像1	要旨・設定	状況説明	デモ	マ	ッテ
24		評価	所感			ワケ+ヨ
25		付加	状況説明			ッテイウ
26		設定	状況説明	ダカラ		
27		評価	所感		テ	
28		付加	状況説明			
29			状況説明付加	マ	デモ、ネ、	ケド
30	自分の理想像2	思案	思案	ソー	ナー、アト	ナンダ
31		設定	所感・状況説明			ネ
32		評価	所感			ッテイウカ
33	自分の得意技	紹介・設定	状況説明			ダカラ
34		評価	状況説明			ト

35			状況説明付加			
36	自分の苦手な技	設定・紹介	状況説明			テ
37			状況説明	マ		ケド
38			状況説明付加	デ	ケド	テ
39			状況説明	ネ		デ
40		結果	状況説明付加			ケド
41	自分の理想像まとめ	設定	状況説明・所感	ナンカ		ト
42		評価	所感	ヤッパ		シ
43			状況説明	ソシタラ	ッテ	ト
44		評価・結語	所感			ケド+ネ、ウン
45		思案・結語	思案	アト	ナ、ンー、	カナ
46		思案・話題転換	思案	ット	ナー	
47	駄目な選手の話 1	設定	状況説明	ンアト	ッテ	ニ
48		評価	所感		ニ	ワ
49			所感		ナンカ	ッテーカ
50		設定	状況説明		アレヤシ、ナンカ	シ
51		思案	思案		ナンテイウカ	ネ
52	駄目な選手の話 2	設定	状況説明			トカ
53		設定	思案・状況説明	ト	ナ	トカ
54		評価	所感	マア	ネ	ンー
55		結果・結語	所感		ンー、ナンカ	ナ
56	練習中の事件	出来事 1・紹介・評価	所感・状況説明		ナンカ	ノ+ヨ
57		紹介	状況説明付加 1	ソイデエ		ッテー
58			状況説明付加 2		テ	ノ+ヨ
59			状況説明付加 3	ソエデ		
60			状況説明付加 4	ンデ	ケド、マ	ノ
61		出来事 2	状況説明	ソシタラ	ナンカ	テ
62			状況説明付加		ノ	デ
63		出来事 3	状況説明	ソレデ	ナンカ	テ
64			状況説明	マア	ナンカ、ソウ、カラ、マア	ミタイナ

65			状況説明付加			ケド
66	事件について思うこと	評価	所感		ッテーカ	ノネ
67			所感			シー
68		評価・結語	所感			ノヨ、シー
69		思案	所感		ナ	ウン
70	自分が大学で上達した理由	話題転換・要旨	状況説明	アトー		
71		設定	状況説明			ッテ
72	以前の問題点1	設定	状況説明		イヤッパ	
73		結果	状況説明		テ、テ	リ
74			思案・状況説明	ト	ナンダロナア、	デ
75	以前の問題点2	要旨：もうひとつの理由	状況説明			ケド
76			状況説明		リ	ト
77	以前の問題点3		状況説明	ト	シー、ナンカ	テ
78			状況説明付加	ンデ	ナンカ	トカ
79	以前の問題点4		状況説明	ト、ナ	シー、マァー	トカ
80			状況説明		テ、シー、	
81	大学以前の自分		状況説明	アト	マァ	
82		評価	状況説明		マァ、ト	ッテイウカ
83		評価	所感・状況説明	マァ		ケド
84		評価	所感・状況説明		ネ	シー
85	サークルの説明		状況説明		ッテ	ナン+ヨ
86	上達の要因1		状況説明	デー	デー	
87			状況説明付加	ナンダー	ネ	
88		結果	状況説明・所感			ナ
89			所感		ッショ	シ
90		出来事	状況説明・所感		ネ	ネ
91		結果	所感・状況説明			ッテ
92			所感	ソエデ	ン	カナ
93	上達の要因2		所感	アト	ウン	ナ

94	上達の要因3		状況説明		ナンダロナ、マ	デ
95			所感			
96			所感	マ	ナンカ	シ
97			所感	マア	ナー	ン
98	上達の要因4		所感	ン	ナー、アト	カナ
99	上達の要因4の説明	出来事・結果	状況説明		ッテガ、ッテイウカ	ン
100			状況説明	マ		ケド
101			状況説明	マ	ッテカ、ネ	ン
102	上達の要因5		所感	アト	テ	ン
103			状況説明		ナ	ッテユーカ
104	驚きと上達の要因5の説明	紹介	状況説明	ヤッパ		テ
105			状況説明	ソエデ	ケド	デ
106			状況説明	デ	ッテイウカ、マ、シ	ン
107		結果	状況説明		ッテ、ソレデ	ン
108		評価	所感	ヤッパ		シ
109			所感			
110			所感		ネ、ケド	ン
111			所感	マア		
112			所感		ウン	ウン

2. 4. 分析結果

分析表の「内容」の項目を数え簡単な表にした結果、下記のようになった(単位:回)。「状況説明付加」は、「状況説明」を補助する項目である。よって、談話分析の上では、

状況説明	53	73
状況説明付加	20	
所感	37	
話題確認	1	
思案	8	

状況説明と同等の役割を果たすものとして数える。状況説明付加を数に含めた場合、話者Aの談話には「状況説明」の項目が比較的多いことがわかる。これは、久木田(1990)の説をもとにすると、「客観説明累加型」の特徴に近い。

ただし、小テーマ別に見ていくと、必ずしも「客観説明累加型」とは言い切れない部分が見られる。例えば、41～

の小テーマ「自分の理想像まとめ」では、「評価」の要素を持つ文は「主観直情型」の特徴である所感に分類されている。同様に、47～の「駄目な選手の話1」、52～「駄目

な選手の話2」でも「評価」の要素を持つ文は「所感」に分類されており、63～「事件について思うこと」では小テーマ中のすべての文が「所感」に分類されるなど、話者Aは「評価」の要素を持つ文を述べる時は、「東京型」の特徴である自身の主観を露に述べ相手を納得させていく話法を取っている。また、81から談話資料の最後までは、話者Aが大学に入学してからテニスが上達したことについての要因が語られているが、その際、話者Aは上達の要因について語ることで思案し自身の意見をまとめており、その結果として、所感と状況説明（状況説明付加含む）の割合はほぼ同等となった。以上のことから話者Aの談話展開の型は、「客観説明累加型」に近いものの、談話の内容によっては「主観直情型」と「客観説明累加型」の両方の要素を持つことがわかった。

談話資料1は小テーマを元に大きく3つのまとまりから構成されている。1～46（テニスへの思いや自分の理想について）、47～71（テニスをしているときに遭遇した嫌な事件やマナー違反について）、71～112（大学に入ってから自分のテニスの上達について）である。小テーマ別に、所感と状況説明（状況説明付加含む）の登場回数をそれぞれ数え表にすると、以下のとおりになる（単位：回、（ ）内は％）。

	状況説明	所感	その他
1～46	29(63%)	12(63%)	5
47～71	15(60%)	9(36%)	1
71～112	30(61%)	18(36%)	1

総合的に見ても、ほぼ状況説明の総数の値は安定しており、全体を通して話者Aが客観説明累加型に近い談話展開の型を持っていることが分かる。

また、文末表現などにはところどころ徳島方言の影響が見られることから、共通語のみを使用しているわけではないことがうかがえる。

3. 談話資料1と他の談話資料の比較

3. 1. 「はえぬき」の徳島方言話者との比較

2の談話資料1の分析結果から、話者Aの談話の型は典型的ではないものの「関西型」に近いという結論が出た。しかし文末表現など語法全般に関しては、むしろ共通語に近い言語を使用していることがわかった。そこで、話者Aと「はえぬき」の徳島方言話者との間にどのような差が見られるのかを探るために、話者Aと同学年、同性の「はえぬき」の徳島方言話者を選抜し、2と同様の方法で談話を録音・分析し、談話資料1との比較を行った。結果、話者Aは談話資料1の中で約7：3の割合で状況説明（状況説明付加含む）を多用しているが、「はえぬき」の徳島方言話者は約9：1の割合で状況説明（状況説明付加含む）を多用しているという差が見受けられた。これは話者Aが言語

形成期の一時期を「東京型」（＝所感の割合が多い）の型を持つ地域で過ごしたことが反映されていると取れる。

3. 2. 「聞き手」を変えた場合の談話資料1との比較

話者Aにとって談話資料1の際の聞き手である筆者は、あくまでも「はえぬき同然の徳島の友達」である。これは話者Aと筆者が徳島の中学校時代の同級生であったためである。談話資料1では、主に文末表現などに徳島方言の影響と思われる、共通語にはない表現が見られ、「関西型」に近い談話の型が見られた。そこで談話資料1の録音方法と全く同じ手法で、聞き手のみを筆者ではなく話者Aが大学進学後に知り合った友人に置き換えて談話を録音・分析した。その結果、話者Aは「はえぬき」の徳島方言話者の談話と同様の値である、約9：1の割合で状況説明（状況説明付加含む）を多用する、典型的な「客観説明累加型」の談話展開をし、一方で使用方言としては徳島方言の影響が全く見られない、「共通語」を話した。

4. 話者Aの使用言語スタイルに関する総合的な結果

言語形成期に方言的差異の大きな地域を歩き来して育ち成人した、転勤族の子女をインフォーマントとして設定し、地域言語が人の使用言語スタイルに及ぼす影響を明確にすることを目的として、話者Aをそのインフォーマントに設定し、調査を行ってきた。

話者Aの使用言語スタイルについて端的に述べるとするならば、共通語に近い言語を使用しつつも、談話展開の型は「関西型」に近いものを持っており、文末表現や接続詞などに部分的に徳島方言が混じっている。話者Aの使用言語スタイルは「関西型に近い談話の型」と「共通語と徳島方言の使用」であることが読み取れる。これは言語形成期に東京で5年間を過ごした経験と、現在の住環境の影響から、共通語を使用しつつも、談話展開の型としては「はえぬき」の徳島方言話者とは同等レベルではないものの、「関西型」と呼ばれる徳島方言話者の型に近い談話の型を持つことを意味する。これは成人後の今もなお、話者Aの中での使用言語に無意識の「ゆれ」が生じているからだと思われる。

文末表現などに出現した方言的表現とは違い、談話の型というものは、専門的手法によって分析してはじめてわかるものである。話者Aは一見、共通語を流暢に使いこなしているように見えるが、分析してみると、共通語（東京方言）に見られる型とは明らかに異なる談話の型を持っており、それは言語形成期後半を徳島で過ごした経験の結果が表れたものと思われる。なお、話者Aが現在、決して無理をして共通語を使用してい

るわけではないということは、話者Aにとっての「はえぬき」の徳島方言話者である筆者が聞き手となった談話資料1の約20分間の談話中でも、ほとんど徳島方言が使用されなかったことから、明らかである。

したがって、話者Aは、言語形成期に東西を大きく行き来して育った影響を、成人後の現在でも受け続けており、それは今回調査した結果、明らかになった。

5. 新しいスタイルとしての「混合型」と「使用言語シフトスタイル」

話者Aの使用言語スタイルは、「関西型に近い談話の型」と「共通語と徳島方言の使用が見られる」ものであると筆者は結論づけたが、話者Aの使用言語スタイルを仮にひとつの「混合型」として定義づけるならば、逆の複数のパターン「混合型」である「東京型の談話の型」と「ある地域方言使用」が見られる人物や、「関西型の談話の型」と「ある地域方言使用」が見られる人物が存在するであろうことは、容易に推測できる。これは齋藤ら(2000)の研究結果で、「東京型」と「関西型」の両要素が混在する「中間型」が認められたことから、非常に現実味を帯びた仮説である。

人間の使用言語スタイルには、言語形成期に受けた居住経験などに基づく言語的影響が強く反映される。話者Aのような転勤族の子女は、言語形成期に方言的差異の大きな地域を行き来したことが、その成人後の使用言語スタイルに複雑に影響しており、話す相手(聞き手)によって、器用にその使用言語スタイルをシフトしている。その結果、専門的分析を行わなくては明確に表れないような、談話の型などのレベルでも、「はえぬき」とは別の使用言語スタイルを持っていることが、今回の研究で明らかになった。本稿では、話者Aのように使用言語スタイルをシフトする者のことを、「使用言語シフトスタイル」として新たに定義づける。

また、自然談話の型そのものと、その際の使用言語に2つ以上の地域性が見られる「混合型」は無数にパターンがあることが予測され、その複雑さからか、現段階では方言研究の対象外とされがちである。しかし、実際に、方言研究の理想的対象と見なされないながらも「混合型」の使用言語スタイルを持つ人物が存在している以上、何らかの形で類別する手段を考えなくてはならない。

ただし、筆者の言う「混合型」と齋藤らの言う「中間型」は、別のものであることをここに明記しておく。齋藤らの研究での話者たちは、首都圏に大学入学と同時に集まってきた若年層で、言語形成期終了後に自身の選択で意識的に共通語を使用している成人の、共通語使用時の談話展開研究であるためである。また、「中間型」の「型」とは、談話展開の型を指す。

一方、筆者の研究は、あくまで言語形成期および使用言語に「ゆれ」が生じやすい年齢に、異なる言語が存在する複数の地域での居住経験を持つ成人の、自然談話の談話分析研究である。無意識に受けてきた言語的影響がその後の使用言語にどう関係しているのか、そして話者の使用言語が既存の方言研究ではっきりと分類できるものに当てはまらない場合、「既存の方言研究と照らし合わせたところ、明確にあてはまる方言がなく、複数の要素を持つ言語を使用する（＝使用言語シフトスタイル保持）」という広い意味で、「混合型」と呼び、分析・考察する。この場合の「型」は談話展開の型のみにとどまらず、文法や発音も含む全体を使用言語スタイルという意味である。

今後の日本国内での言語研究で、この「はえぬき以外」の存在は決して無視できるものではなく、新しい言語スタイルを持つ人物として認め、何らかの位置づけの方法を考えていかななくてはならない。そして特に、言語形成期を複数の異なる地域言語に触れながら過ごし、成人した人物を調査することは、狭い国土に多数の地域言語が存在する日本の言語研究において、重要となるであろう。

おわりに

本稿中で筆者は、言語形成期に方言的差異の大きな地域を歩き来した「はえぬき以外」の人物である話者Aを、「混合型」の使用言語スタイルを持つ、「使用言語シフトスタイル」の人物として定義づけたが、その「混合型」にも無数のパターンがあることが予測される。人間の言語形成には、居住歴や両親などの同居人との間での使用言語、その人物を取り囲む社会構造などが、複雑にかかわっているためである。

今後、「はえぬき以外」の人物の使用言語についての調査を進め、研究方法をよりいっそう明確に確立することにより、より深く現代を生きる日本人の使用言語を知ることができるはずである。

談話資料1（漢字かな表記）

1 テニス理論…／2 そもそも、テニスは、多分技術半分、精神半分のスポーツだと思うのね。／3 どんなに技術力があっても、やっぱ、精神力が、ないと、／4 いやっぱそれについてかないと思うんだよ。／5 たとえば、よくプロ野球のピッチャーで、なぜエースか、ということ、エースたる所以。／6 ころわ、普段調子いいときに勝てるのは当たり前で、／7 調子の悪いときに、どういう風に勝つか、を考えるのがエースなわけね。／8 で、テニスも、ね、テンス（テニス）はもうさらにそれを強くしたってえか、感じで、／9 そのポイントが、すごい長いわけよ。／10 どんなに調子よくても、／11 なんていうかな、／12 一本、あ、一点は、の重みは一緒って一か、大体一緒なのね、／13 そーわ（それは）ポイントのときに取るか取らないかすごい重要やけどね。／14 一本のと

きは一緒、あ、一点は一緒なのよ、／15そいで（それで）、その一点を、相手のミスで取るか、／16
 自分がもんすごい（ものすごい）バシっときめて取るか、ってのは一緒なわけでしょ。／17となる
 と、ね、自分が、思いっし打って、ミスって、ポイントを失う。／18とか、なんか、そーゆー、
 なんていうかな、んー、／19だから、んー、んー…／20だからあ、絶対ミスらないのが重要だと思
 うのね。んー。／21どんなにすぐきめても、ミスの方が多かったら負けるし、／22んー、ん、テ
 ニスで勝つためには、そうすべきだと思う。／23でも、ま、俺のその理想像ってのがあって、／24
 なるべくそういうポイントを多くしたいわけよ、／25自分の完璧な、攻撃、方法で、点を取るって
 いう。／26だから、その欲求も、自分の中で、叶えつつ、／27ポイントのバランスを見て、出して
 いくっていうのが一番いい方法じゃないかなって思う、／28テニスで、試合を、するときに。／29
 ま、でも、ね、ながなが（なかなか）うまくいかないけど、いつも。／30んー、そうだなー、あと、
 なんだ、／31あーな（穴）を少なくしたいってのが、あるね。／32どっか弱点をなくしたいって
 いうか、／33おれあ元々、フォア、テニスのフォア、が、得意だから、／34それがウイニングショッ
 トを持ってると。／35絶対ひとつ。／36だからそれが強みなんだけど、だから逆にバックがずつ
 と弱くて、／37ま、ボレーも下手だったけど、／38それで、ずーっとバック（バック）をこーこー
 （高校）時代とっから（時から）練習してきたけど、なかなかうまくなくて、／39そうだね、全
 部すごいウイークポイントで、／40試合でもなるべく打たないようにしてたけど、／41なんか、こ
 う、もっとかっこいいテニスがしたいなと思うと、／42やっぱ、全部できたほうがかっこいいな
 と思うし、／43そしたら、ウイニングショットもあって、穴もないと。／44そー（それ）はすばらし
 いプレーヤー、プレーじゃないかなと、思うけどね、うん。／45あとなんだろな、んー…そーうだ
 なー、ま、そんなとこかな。／46つとなんだろな（せき）／47んあと、こー、テニスー、を一、
 なんかこう、お互い打ち合って、う乱打してるときに、／48練習してるときに、変わらない奴あ
 ーダメだと思うわ。／49長いこと打って、なんか、そういう気の、気を使えるようになってほしい
 ってーか、／50テース（テニス）はそもそもマナーの、あー、あれやし、なんか、マナー、紳士のス
 ポーツやし、／51そー、なんていうか、ね、／52打ってる、お互い打てるときに後ろ通らない
 とか、／53あとなんだろな、後ろから、人が打てるときに、後ろから球を打たないと、／54ま
 あ、ね、そういうのがちゃんと、してほしいなとーもう（と思う）、んー。／55そうしないと、んー、
 なんか、する資格がないと言いたいな、俺は。／56こないだむかついたのが、なんか、壁打ちをし
 ってたのよ。／57そいでえ、二つ壁打ち場があってー／58きとつ（ひとつ）は俺がやっつて（やっ
 て）、もうひとつは親子がやっつた（やっつた）のよ。／59そえて、親子があ、ちょっときゅうけー
 （休憩）してた。／60んで、俺は、俺もちょっときゅうけー（休憩）してたけど、ま、打ったりして
 たの。／61そしたら、そのきゅうけー（休憩）してるところに、なんか、わけのわかんない少年が、
 自転車で来て、／62打ち出したの、その、親子のところで。／63それで、なんか、親子はちょっと
 びっくりして、／64まあ、なんか、そう、そいつが打ち出したから、まあ帰ろっかみたいなの、／65
 そーゆー感じなんだけど、／66まあ、そいつはマナーがなってないってーか（っていうか）、ダメだ
 と思うのね。／67テニスをする資格がないと思う。／68そーゆーところを、ちゃんとしてほしいな
 と思ってるのよ、うん。／69そーだな、うん。／70あとー、どうして俺が、大学に入って、から、

テニスがうまくなったかっていうのを考えたときに、/71まあ、要因が多分いくつかあって、/72毎日なんかテニスやってると、いやっぱ、手の皮膚とかが、/73切れて、なんかこすれて、すごい痛いから、嫌になったりする要因があったー、り、/74となんだ、なんだろうなあ、ポ、自分の、ま、それは物質的に、なに、理由で、/75もっと他にも物質的な理由はあるけど、/76他にはなんだ、ガットが切れやすくなったり、毎日やってると、/77となんだ、テニスコートが、んー、すごいなんか、クレーでゆがんで、/78んで、なんか、まともに跳ね返ってこないとか。/79となんだろな、んー、まあー、コート内で打てな、あんま打てないとか。/80人数が多すぎて。うんー、まそういうような要因。/81あと、まあ、その物質的な、あれの反面、/82精神的にも、まあ、子供だったし、となんだ、向上心があんまなかったっていうか、/83まあ、できるようになればいいなーと思ってたけど、/84そんな、ね、向上心、とまでいえるまでのものはあったかどうか。/85んー、ただー、でも、大学に入って、サークルやりだすとー、大体週に二回くらい、なんよ。/86でー、それでー、週二回くらいだから、/87なんだー、そのーね、けっこーなんつーか、/88少ないからー、ポテンシャル、ポテンシャルじゃないな、/89モチベーションが上がる、っしょまずテニスやりたいって思うし。/90そうなってくると、ねやっぱ、ね。/91一回、一球一球を大切にしようって思うようになって、/92そえて、それが結果、うまくなるんに繋がったのかな、とか、ん、思うんかな。/93あと、俺よりうまい人が、二三人いたっていうんが、うん、大きいかもしれんな。/94あとーはー、なんだろうな、ま、やっぱ、女の子も一緒にやるってことで、/95バックができないとちとこかこ悪いかな、とか思ったりする。/96ま、全部できたほうがなんか、いいし。/97まあ、そんな感じかなあー、んー。/98んー、そうだろうなー、あと、ボレーができたらかっこいーなって思ったのも、そ、要因かな。/99それまでボレーってのが、ごうごう（高校）時代、まともに教えてくれる人がいなかったっていうか、んー。/100ま、大学でもいなかったーけど、/101ま、見よう見まねってーか、なんかね、自分なりにやってうまくなったこと。/102あと、一番大きいのはやっぱ、サークルじゃなくて、授業の健康スポーツかもしれん。/103あれはあー…なんだろうな、すごいなんだろう、ポテンシャルじゃなくてモチベーションか、モチベーションが上がるってゆーか、/104やっぱ、うまい人が回りにいっぱいいて、そえてその中で自分、サークルでは結構うまいほうだったけど、/105ケンスポ（健康スポーツ）行ってみたら全然下手くそで、/106で、びっくりっていうか、ま、うまい人とやったほうがおもしろかったし、んー。/107実際、いー刺激になってまたそれが向上、心に繋がって、それで、ん。/108やっぱ自分より強い人とやるっていうのは楽しいし、/109ちよっと強い人とやるってのが一番楽しい。/110強すぎるとちよっと、ね、もう、相手にならんけど。/111んー、まあー、ケンスポはまあかなり大きかったかもしれない。一番。/112大学生活で、うん、うん。

参考文献

- 安部清哉（1999）「東西方言と諸相と日本語史の課題」『日本語学』（48）
 飯豊毅一ほか編（1984）『講座方言学5 関東地方の方言』国書刊行会
 飯豊毅一ほか編（1984）『講座方言学7 近畿地方の方言』国書刊行会

- 飯豊毅一ほか編 (1984)『講座方言学 8 中国四国地方の方言』国書刊行会
- 井上史雄ほか編 (1995)『日本列島方言叢書 7 関東方言考③ (東京都)』ゆまに書房
- 井上史雄ほか編 (1995)『日本列島方言叢書 13 近畿方言考① (近畿一般)』ゆまに書房
- 井上史雄ほか編 (1995)『日本列島方言叢書 21 四国方言考① (四国一般・徳島県・高知県)』ゆまに書房
- 井上史雄・篠崎晃一・小林隆・大西拓一郎編 (1997)『日本列島方言叢書 21 四国方言考 1 四国一般・徳島県・高知県』ゆまに書房
- 大橋勝男 (1983)『方言・共通語』『国語概説』和泉書院
- 久木田恵 (1990)『東京方言の談話展開の方法』『国語学』162
- 熊崎みどり (2001)『『だから』と『それで』の機能について—話者の主観性との関連—』『地域言語調査研究法』おうふう
- 齋藤孝滋・奈良夕里枝・晋萍・伊藤孝浩・原奈々江・フェリス学院大学地域言語調査会 (2000)『共通語使用の談話展開類型と言語形成期獲得方言の影響』『日本方言研究会第71回研究発表会発表原稿集』日本方言研究会
- 柴田武 (1956)『言語形成期というもの』石黒修ほか編『子どもとことば』東京創元社
- 泉子・k・メイナード (1997)『談話分析の可能性』くろしお出版
- 園部美由紀 (1999)『豊橋方言における談話展開の方法—東西方言折衝地域太平洋側における談話展開の方法—』『地域言語調査研究法』おうふう
- 田中香織 (2003)『談話展開研究に関する方法論の日米対照研究—談話展開の対照言語学的研究のために—』『第11回社会言語科学会研究大会予稿集』、社会言語科学会事務局
- 田中香織 (2004)『同一人物における談話展開の方法のバリエーション—内容差についての一考察—』『言語と人間』6・7号
- 中島和子 (2002)『バイリンガル教育の方法—12歳までに親と教師ができること—』アルク
- 野崎希世江 (1999)『江戸語における談話展開の特徴—年齢層・性・上方語の観点から—』『地域言語調査研究法』おうふう
- 畑中宏美 (1996)『富山県水見方言の談話展開の方法』『北海道方言研究会20周年記念論文集 ことばの世界』北海道方言研究会
- 平山輝夫編、大島一郎・大野真男・久野真・久野マリ子・杉村孝夫・上野和昭著 (1997)『日本のことばシリーズ36 徳島県のことば』、明治書院
- 藤原与一 (1982)『昭和日本語方言の総合的研究第三巻 方言文末詞 (文末助詞)の研究 (上・中)』春陽堂書店
- Labov, William (1972) *Language in the Inner City*, Philadelphia, University of Pennsylvania Press
- Labov, William and Joshua Waletzky (1967) *Narrative analysis: Oral versions of personal experience* *Essay on the Visual and Verbal arts*, University of Washington Press